

武士の 一大事は 死するに あらず!

板橋に刑場に屍となる

大群林によれば「切腹」とは、自分で腹を切って死ぬこと。平安末期以降、武士の自決手段、あるいは「江戸時代、武士の名譽を重んじた死罪」とある。それゆえ、自決には武士の情け、として、誰である刀が切腹に用いられるのが常だった。

ところが、事末にその名を懸かせながら、幕府は切腹を許さず、斬首され、その首を晒された男がいた。近藤勇。はく千も懸る、と言われたあの新選組(新選組)の隊長である。下総洲山で近藤を中心とした幕軍が約3,000の首領に包囲され、出陣を命ぜられたのは慶応4年(1868)4月26日のこと。当初は自

《旗軍後け絶えて落因となる
頼みて若恩を思へば涙更に流る
一片の丹衷能く錦に染ず
塵陽は千古爰れ香が橋》
《他に勝き今日復た何をか言はん
義を取り生を捨つるは吾が身が所
快く受けん電光三尺の剣
只に一死をもって若恩に報いん》
近藤勇の辞世の句二首の
書き下し文である。
発句の時、近藤に去来した思いは
何であつたらうか。

身を大久保大和と名乗り身分を偽っていたが、新選組当時の近藤を知る者の面通しにより、その正体が目印のもたれをうけてしまう。

結果、近藤は坂本龍馬や中岡慎太郎暗殺の首謀者として土佐藩の主導により4月26日、板橋の刑場で処刑されることになった。だが、切腹ではなく「罪人としての斬首であった。

中山道の平塚一里塚にほど近い馬捨場にある刑場には、歴史が教が乳首を晒すための穴が掘られていた。腰刀を付けられた近藤は腰座の上で座らされ、後ろには小役人が繩を掛けて縛る。太刀取りは近藤が出陣後に監禁されていた岡田家の政新指問後、横倉三三次だった。親衆が固唾を飲んで見守る中、最

だが、幕府を出た首領は江口をめぐり進軍を開始する。新選組は甲陽新選組と改称、近藤も大久保剛と改名し、東山道を進む首領から甲府城を守るため出陣することになった。とはいえ、この時すでに首領への謀略を決めていた幕府にとって、腰長士に恨みを買い新選組は、お荷物でしかなかった。そのため彼らに軍資金を渡し、体よく江戸から甲府へと追い払った、というのが真相だったのだ。

甲陽新選組が甲府に入ると、すでに甲府城は首領によって奪取されていた。得着船頂の近藤の大失態。おそろしくこの時が、運命の天地がひっくり返った一大事であつたらう。それでも3月6日、近藤らは首領と勝沼で交戦するが、甲陽新選組の兵力が約2,000に対して首領は約3,000。勝沼は歴然だった。敗走した近藤は江戸へ戻り、組織を立て直すため下総洲山で隊士を募った。だが、その情報が首領側に知られるところとなり、本陣を包囲された近藤は切腹を覚悟するも、土方の脱走により給養所へ出陣。そこに待っていたのが斬首の刑だった。



龍願寺に埋葬された近藤勇の墓。

期の時を迎える近藤に横倉が尋ねる。「申し残すことはなにか」「君の太刀取りにては何も申し置くことを見せし。よろしく頼む」「次の瞬間、上段に構えた横倉の手から刀が一気に振り下ろされ、近藤の首が落した。

近藤勇の墓期——享年35。
近藤は天保5年(1834)10月、武州多摩郡上石原村(現在の調布市)に、農民吉川久次郎の三男として生まれた。幼名は腰五郎。15歳で天然理心流近藤助助に入門。剣の実力を認められ、近藤家と養子縁組をしたのち、文久元年(1861)、27歳で天然理心流の4代目を継ぐことになる。そんな近藤が庄内郡土の清河入郎

死は一大事をなす、自ら拍子寄せた定め事であった。
墓は五か所にあるという。生地藤の龍願寺(三原市)、同土だった水倉新入の建立による処刑された板橋刑場(丁原町東横橋橋)。山形県米沢市の高田寺、福島県会津市の天草寺、愛知県岡崎市の法蔵寺には首塚がある。

今回は、生地に敬意を表して龍願寺に足先を向けた。西武多摩川線多摩駅を降り、駅の後方に回って右に折れ、700メートルくらい歩くと龍願寺に着く。そのわずかな手前の左手に生地藤、座敷の井戸が残る。龍願寺門左横に近藤の胸像が台座の上に鎮座していた。墓は本堂裏の左手にあり、近藤勇は一族の墓の中で静かに住んでいた。

近藤の首を斬った 横倉三三次の弔い

今宵の虎徹は血に染えている——
諷刺をこめて用いられる近藤の有名な決め台詞だ。

近藤は長曾権虎徹里という名刀を3振所有し(うち1振は名工源清庵作に偽名を施したとの説も)、動意の志士たちを養い上げてきた。

によって結成された浪士組に土方歳三ほか道場「武術館」の門下生とともに参加し、將軍警備のために京に上つたのは、文久3年2月4日のこと。報酬は金10両と2人扶持である。ところが、上京直後あろうことが清河が幕府王權へと方針を大転換。「上京の目的は京都の治安回復であり幕府の命に従うべき」とする近藤や平沢橋らは清河と対立、京に残り新選組の前身である「壬辰浪士組」を結成。隊士は近藤を中心とする8名と平沢グループ5名の計13名であった。しかし、壬辰浪士組の知名度が上がるると同時に平沢の乱行が目に見えようになり、近藤は平沢派を離脱。こうして誕生したのが近藤勇、兵士、士方を副長とする義経の組織力を誇る新選組だった。

新選組はその後、京の街で5年ほど活動、動意の志士たちを養い上げてきた。
慶応4年(1868)1月26日、鳥羽伏見の戦いが勃発。新選組も伏見方面の戦場に参戦したが、首領に敗れ大坂に向けて敗走。その後、將軍徳川慶喜の後を追って江戸へと戻った。

虎徹のほか、もう1振、近藤を語るうえで欠かせない愛刀がある。それが近藤の斬首に用いられた仁王清綱作の小刀。岡田家に預け替えとなった近藤は幕期の時を迎えるにあたり、自分の愛刀を横倉に託した。「爾来、徳徳を受け、剛剛る物をし。切腹は叶わずとも近藤を武士として死をせてやりたい——横倉にとっても、そうすることが一大事だったのであるか。」

横倉は明治27年に71歳で亡くなるまで、毎年近藤の命日には仁王清綱の小刀に酒と香華を供え、冥福を祈ったという。死して弔う敢あり。近藤の幸いであった。

こんどういさみ ●1834年(天保5)11月9日~1868年(慶応4)5月17日。本名武川次郎の三男。幼名・腰五郎。15歳で天然理心流道場「武術館」に入門。師の近藤助助に認められ、養子となって第4代目を継ぐ。30歳を前に「浪士組」として京に上る。その後、京都守護職安藤守春の配下の「新選組」副長として、副長の土方歳三らと京都の警備に当たる。京都第一派を擁護させた「油田屋事件」はあまりにも有名。鳥羽・伏見の戦いで敗れた新選組は江戸に戻る。近藤は幕府の命で甲陽新選組に再編成、真本大久保剛に改名して甲州に向かうが、甲州騎河の戦いで新政府軍に敗れる。その後、大久保大和と再改名し、旧幕府軍歩兵を率えて下総洲山に屯集するが、新政府軍に包囲され、赴谷の本営に出陣。慶応4年4月25日(1868年5月17日)、板橋刑場で斬首。首は京三条河原で葬られるが、首の行方は不明となる。享年35(満33歳)。



龍願寺門左横にある近藤勇の墓。